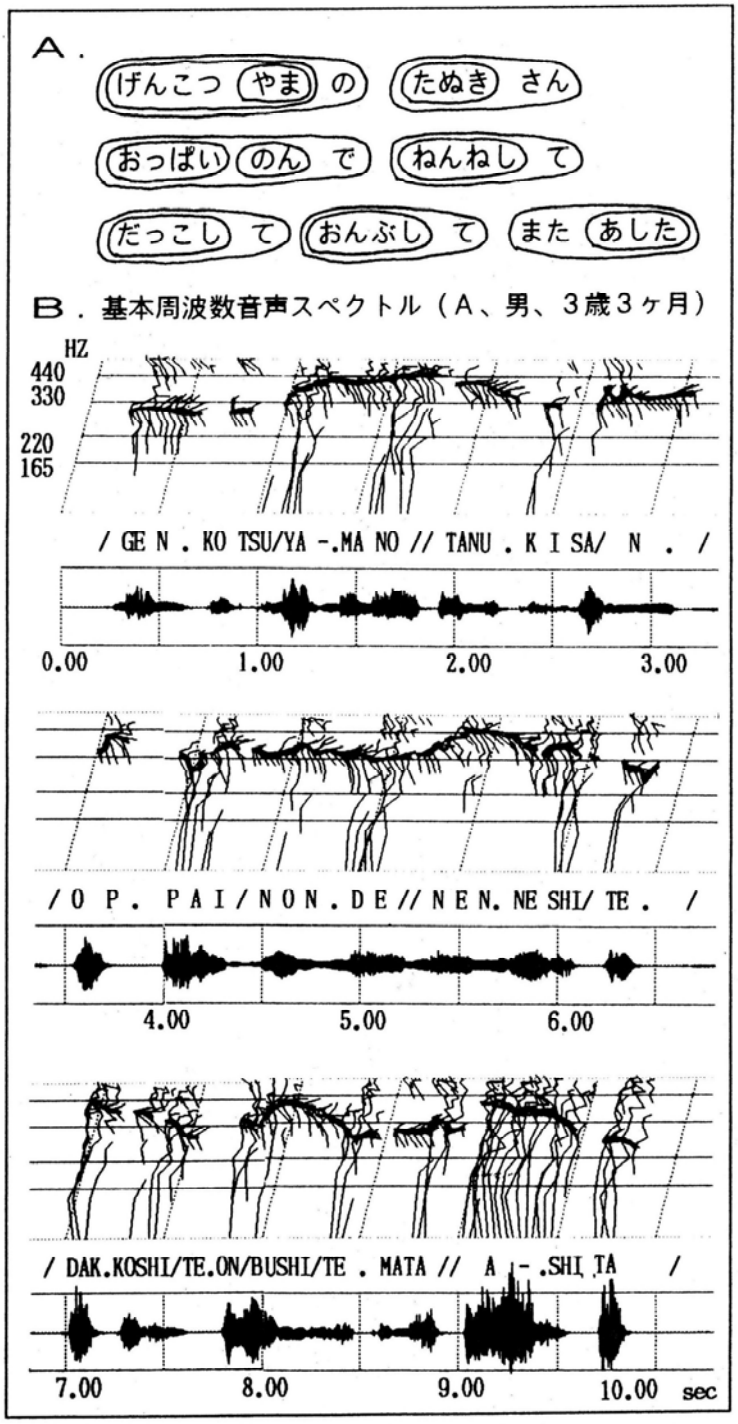
研究雑話(55)
人間発達の物質的基礎(十九)：コトバと叙述(四)、フレーズの生成は「付属語」とともに

藤井力夫

前回は、絵本を読んでもらっている時のある三歳児の発語の実際(Aちゃん、男、三歳三カ月)を例に、文生成における「対話の韻律」の利用についてお話しました。／ナン・デー／コド・モー／ウシ・ロー／イル・ノー／。／ダー・ッコ／ダー・ッコ／ッテ・イッ／テル・ネー／…。対話を支えようとする文生成の「拍節リズム」、そう言ってよいでしょう。一つは、拍節二音のリズム。／○○・○○／の前後拍節各二音の構成。背景には日本語の特徴、孤立しては音節を形成できない音、撥音(ん)や促音(っ)、引き母音(ー)などの存在が効果したものと考えられます。もう一つは、フレーズの立ち上げ形式。二拍節の反復＝四拍節あたりをまとまりとしてフレーズを立ち上げ、二つの立ち上げ、計八拍節あたりで吸気に入る。こうした二つの傾向を指摘しました。とても大きな問題ですので、なにかの参考になれば幸いです。

今回は、これを基調としつつも、さらにどのように次のことばを引き出していくのか、助詞や副詞など「付属語」と呼ばれることばの役割についてお話したい。資料は、同じ子どもの歌、「げんこつやまのたぬきさん」を用意。先回の読み聞かせの終わりに、Aちゃんに歌ってもらったもの。他に、「鯉のぼり」も歌いはじめています。

「付属語」：先の事例では、「なんで」(副詞)、「ーの」(質問のイントネーションを強める終助詞)、「って」(引用の格助詞)、「ねー」(同意を求める終助詞)。英語の場合、性、単・複数、動詞変化等により関係を示しつつ、主語＋動詞＋目的語など位置で表現。日本語はこれと違って、名詞や動詞の「自立語」の前後に、副詞や助詞などの「付属語」を置き、パラディグマやシンタグマの関係を表現。図A、文の構造。図B、先回と同じ要領で音声スペクトル(基本周波数)表示。

／げんこつやまの／／たぬきさん／：やま／と／た／に音高アクセント。**／の／**(格助詞)で音高を上げ、連体修飾。／たぬき／を呼び出す。**／さん／**(接尾語)でも次への期待から連続感。**／おっぱいのんで／／ねんねして／**：促音の前の／お／、撥音の前の／の／と／ね／に音高アクセント。**で／と／て／**。両者とも連用形につく接続助詞。前者は「のむ」の撥音便により「で」に変化。接続感をもたせ次の動作を呼び出す。**／だっこして／おんぶして／／またあした／**：／だ／(促音前)と／お／(撥音前)、そして／あ／に音高アクセント。**／て／**はいずれも前記と同様(接続助詞)。**／また／**(接頭語)は音高を上げつつ「あした」を引き出す。これら「付属語」の韻律が、予備庫から後続語を引き出す契機をなしていると言えよう。(北海道教育大学教授)